

大阪大学リーダーシップ教育研究会 第23回会合 議事録

- 【日時】 2012年10月26日(金) 13:00~15:00
【場所】 大阪大学豊中キャンパス OSIPP棟6階 プロジェクト研究室
【内容】 立法リテラシー演劇ワークショップ「俗議院」について
蓮行先生(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任講師)

【配布物】

- ・アジェンダ
- ・「蓮行流 演劇ワークショップ術プリント」
- ・「蓮行流 経済経営術プリント」
- ・「交渉ワークショップ」概要

【参加者】(五十音順・敬称略)

- 木川田一榮(大阪大学大学院国際公共政策研究科 客員教授)
高橋健治(株式会社東レ経営研究所 特別研究員/大阪大学大学院国際公共政策研究科 招聘教授)
多胡圭一(大阪大学名誉教授/大阪大学大学院国際公共政策研究科 特任教授)
仁木恒夫(大阪大学大学院法学研究科 教授)
野村美明(大阪大学大学院国際公共政策研究科・高等司法研究科 教授)
蓮行(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任講師)

立法リテラシー演劇ワークショップ「俗議院」について

(野村)

交渉力でディシジョンメイキングをさせる、責任感を感じさせるというような効果がある泡沫裁判所というのを説明いただいた。そのとき、裁判だけでなく立法もやりたいと蓮行先生が口をすべらせ、おもしろいと思った。教育研究だけでなく日本の社会に大きなインパクトを持つのではないかと思い、今日、お願いした。

1 蓮行先生の自己紹介

(蓮行)

私がどういった取り組みをしているか、おさらいがてらお話をさせていただく。私は、現役のプロの演出家である。また、大阪大学のコミュニケーションデザインセンター(CSCD)

というところに常勤で雇われている。本務は大阪大学、本職は演出家としている。

1-1 小劇場演劇

私がかかわっているジャンルは小劇場演劇というジャンルである。例えば、この部屋で一本の芝居をやってしまう。机もしつらえもそのままで行う。お客さんも演団も入りまじる。国際的にはフリンジシアターと言われているジャンルである。ロンドンミュージカルの周辺でロンドンシアターにかからない人々がやっているという意味から、だんだんと前衛的な芸術として価値が高いものをさすジャンルとなった。エジンバラでは3年に一度、国際的なフリンジシアターのフェスティバルが行われる。日本からも若手を含め行っている。私は、そういうジャンルでは非常にめずらしいプロの劇団「劇団衛星」を京都でしている。四条烏丸に事務所と劇場をかまえている。その劇団の芸術監督をしながら、全国でネットワークを作り、ジャンルの振興も含めて仕事をしている。

1-2 経営

学歴としては、某国立大学の経済学部経営学科を学部だけで8年かかったが、優秀な成績で卒業し、劇団の経営をやってきた。阪大に就職するまで10期中小企業の社長をつとめる。阪大の規定で営利法人の代表はできないため辞職し、後進にゆずる。その後10期連続赤字から4期連続黒字となり、やめると同時に業績がぐっとあがる。演劇ワークショップでも「蓮行流 経済経営術プリント」というものを作っており、こうすると失敗するという話を中心に行う。今はNPOを作りたいなど、1回生のうちからそれをみこしてCSCDの授業を取りましたという学生や、セカンドビジネスとして社会貢献したいという社会人の方も多し。資本主義の社会ではお金の動きを無視して理念だけを追い続けることはできない。債務超過でも銀行からお金をかりるにはどういうふうに行ったらよいかなど、まさに交渉の話をしてしながら演劇ワークショップをからめている。

1-3 アントランプレナー

実際の社会と経営するのとあまりかわらないような「アントランプレナー」という演劇ワークショップを行っている。アントランプレナーでは前職のジャンルと時給を勝手に決められる。

(例) あなたは前職で農業にたずさわっていて時給1万円の高給取りだった。新しい仕事では、前職の収入を維持しなければならない。そのかわり、前職で高い時給だった人は、資本金として持っているお金の額が大きい。

1分を1日と換算して、だいたい2時間、つまりだいたい2ヶ月行う。2ヶ月後にあなたた

ちの事業が続けられるかどうか判定される。チームで経営をしていく。途中で取引先とのプレゼンをする人や、まず銀行にお金を貸してくれと言う人もいる。事業計画をつくる時にはエクセルで作る。演劇ワークショップというたのしいものを想像するが、終わった後はみんなぐったりとしている。参加者は、現実の方が楽ですという感想を述べて帰る。理屈でなく遊びでも、2時間つまり2ヶ月経営すると大変でしょということを経験するワークショップを行っている。このワークショップは「アントランプレナー」というもののため、トランプで前職を決める。

(例) スペード♠: 工業、ハート♥: 福祉医療、クラブ♣: 農業、ダイヤ♦: 金融

自分の時給と前職を決められているため、新しい事業ではたたみの普及をすると決めるとすると、前職で工業的な開発をしていた人もいることをいかし、違うアプローチで材料を設定するなど考える。

1-4 演劇ワークショップ

演劇ワークショップは、設定がありキャストが決まってくるとストーリーは勝手にできてくるとするのが特徴である。設定とキャストをどのようにするかということをお腹において、アントランプレナーや泡沫裁判所でも考えている。演劇ワークショップは、中小企業を経営していく上で、演劇でどのように収入を得ていくかということから始まった。もともとは10年前に宇治市の小学校で、「演劇で算数」というプログラムを開発してくれないかとたのまれたのがきっかけである。はじめは、中学の数学に向けてどのように学力をあげていくかということを考えていた。しかし、小学5年でも割り算ができない子どもが2割3割いたり、小数点の計算ができない子どもがいたりする。そのような子どもは学校に教科書を持ってこず、授業中ずっとうつむいている。先生はなんとか基礎学力をと思うが、その子どもたちは週に何時間もただ時間が過ぎるのを待っている。なんとかその子どもたちにもう一度教科書を持ってきて、開いて、九九からやってみるかという気持ちにさせるプログラムをということから考えた。子どもたちはストーリーが設定されているところに参加すると当事者意識がわく。1回目は大失敗。2回目は教室をかえ、チケットを用意し、わざわざ鑑賞会へ出かける設定にした。演劇の内容は、いたずら悪魔がでてきて算数にまつわるいろいろな問題をおこすというものにした。子どもたちには工作をさせ、キャストとしてかかわれるしかけをしている。演劇の中では、だいたいの算数の問題を登場人物が自分で解いてしまう。しかしこの演劇では、絶対に解かない。すると次第に子どもたちは声をあげだす。担任の先生にもひどい役で出演してもらおう。子どもも手をあげ、自分も参加したいという気持ちになるのが大事。

1-5 当事者意識

そこで鍵となるのは、当事者意識である。それは突き詰めていくと、自らの主権を意識するということである。演劇ワークショップは自分の人権に非常に大きな影響を与える。このことは演劇以外の手法ではむずかしい。演劇は設定と役割があり、主権を擬似的に発動できる。

1-5-1 環境演劇

いつもはシャワーをだしっぱなし、ストーブをつけっぱなし、牛乳パックもリサイクルにださない、という場合でもみんなの前でそんなことは言えない。環境問題について議論しようというとき、どこかで教科書のような答えがあり、そこからはなれられない。ソーシャルな場になればなるほどはなれることができない。特に授業参観では、子どもは絶対に言わない。しかし、役割を与えるとどうなるか。

(設定) 2200年から現代にやってきたエコパトロールという環境を取り締まる警察官
現代には、ゴミを分別しなかったりテレビを見ないときに電気を消したりしない大人がたくさんいる。そういう大人が環境破壊をすることで困っている人がたくさんいる。森の中ではすみかを奪われてクマが人里へ降り、絶滅危惧種やツバルの問題もある。2200年にはもっと進んでいてエコパトロールは本当に困っている。21世紀になんとかするしかない。エコパトロールとして逮捕する役、あぶらを川に捨ててしまう悪役、川に油を捨てられて困っている魚たち。2200年というのがポイントとなる。環境演劇は未来に向けてというのがキーワード。2200年という設定が何でも解決してくれる。メダカの声もきくことができる。いいものでも悪いものでも被害者でも何でもしてみてもいい。この話をおもしろくするためにはどういう問題について議論するのがいいだろう？私ではない私は環境破壊班として、油を捨てるのは面倒くさいだけでなく、捨てた方が栄養になるという台詞を言う。そして、環境団体とディスコミュニケーションをおこす。

演劇ワークショップは擬似的な他者を演じながら、いろんな意見を忌憚なくぶつける。そして、今の自分の目先の便利さを犠牲にしても、未来のために一手打つことがベースにある。つまり、自分の主権の発動である。私は私の主権を目先の自分の生活ではなく、自分の子どもや孫や未来のために投資するという主権を子どもながらになんともわかる。子どもたちの感想の中には、テレビで言っていた環境や理科や社会の授業でやった環境というのはこういうことだったのかというものがある。頭では知っているだけで実際にはわかっていない。小学校の教室や夏休みに合宿形式で、山に川魚を釣りに行ったり、森でゴルフ場開発に失敗して立ち枯れしている木々を見に行ったりする。これらを劇の内容として

いくため、きいておかないと劇で活躍できないという当事者意識がうまれる。演劇ワークショップそのもので主権を発動し、未来を含めた様々な課題について当事者意識をもって議論し交渉し解決していくという疑似体験をする。上演すると大人にも一筋縄でつくっていかないということが伝わる。合宿にはリピーターが多く、本人も行きたいし親も行かしたい。

1-5-2 その他の演劇

環境の他にも、算数、防犯、防災、食育というテーマに取り組んでいる。岡山県立大学の保健福祉学科では、糖尿病を治療する医師も糖尿病の予防や治療に演劇の手法をもちいることができないかと考えている。糖尿病の患者は自分で食事制限できないため糖尿病となっている。患者の治療と家族の理解、医療者からも患者に届くような話し方やデータの示し方をすることを通して、患者予備軍を患者しないという取り組みを行っている。さらに子どもに演劇ワークショップを上演させることにより、設定やストーリーを通して患者にも当事者意識をもってもらう。他にも歯と発話、予防医学、学校歯科医師会との関連の取り組みもある。そのような様々な取り組みの1つに泡沫裁判がある。

(高橋)

演劇のシナリオ、台詞ははじめから決まっているのか。

(蓮行)

ワークショップにもいろんな定義があるが、双方向性を重視している。シナリオをつくるときにも子どもたちと相談しながら進めていく。その中で出てきたものに、喜多方市の例がある。喜多方市は観光都市で、住民の環境意識が高い。しかし、観光客のゴミや排気ガスのマナーが悪い。そこで、観光客が環境破壊班となることにした。地元の人はマナーが悪いことをだめなことだと思っているが、お客さんのため言うことができないのを子どもたちは見ている。このように、想像して描くシナリオよりすばらしいものができる。見せ方や台詞は俳優や演出家が言う。おおまかな設定と議論のテーブルさえ決めていたらよい。重大な人権侵害は大人や先生がチェックする。自分が当事者として主権を発動しないとどうにもできないことを実感。

2 司法リテラシーワークショップ・立法リテラシーワークショップ

司法リテラシーワークショップと立法リテラシーワークショップを企画している。立法ワークショップとその前段階としての司法ワークショップである。ポイントは主権を発動す

ということだけではないこと。段階ジュニア世代では、個性は大人になってから発揮するものだった。しかし今はみんないろいろでみんないいと言われ、個性を発揮することがいいと言われている。一方で、1つにまとまらない限りみんなが好き勝手なことをやっていて、社会の機能が成り立つのかという疑問がある。みんなが主権をもって主権を発動し、発動したうえで合意を形成、つまり交渉することを小学4年生以上に向けて行っている。子どもたち一人一人が主権を発動し、合意を形成する。これは演劇ワークショップの根底にあることである。教育学では、子どもが自分を尊いと信じていることができる気持ちが大事である。自分のような尊い人間は、目先のためにゴミをポイポイせず、孫のことまで考えて行動する。法は、一人一人が最大限自分を発揮できる社会を機能させていくためにある。司法リテラシーワークショップと立法リテラシーワークショップは、日本における市民社会の法治国家としての理念をある程度子ども、中学生以上でも理解できるものを開発して実践していこうとしている。

2-1 泡沫裁判所

泡沫裁判所は中学生以上に向けて行っている。中学生は人権意識が薄い、コントロールしすぎると人権侵害となる。一方でコントロールしないと人権侵害をしていることになる。司法ワークショップは、主権の発動と合意の形成を行う。まず、いきなり3人ずつくらいのチームを3チーム～4チームつくる。ここではまだ、泡沫裁判所や司法リテラシーワークショップを行うことを言っていない。チームづくりは工夫し、いろいろな人が混ざるようにする。「人には、1つや2つ人には言えない罪を犯したことがあるはずですよ。」と言う。演劇ワークショップのコツは、先に大人が恥ずかしいことをすること。自分が犯したいろいろな罪の中でも、笑えるけれど心に引っかかっているものを出し合う。それぞれのチームの中で出し合い、このチームではこれが一番おもしろいというものを発表する。

2-1-1 犬糞体操服袋混入事件

50歳くらいの女性は、小学2年生のとき、隣の席のタケダくん(仮名)に大事にしていたハンカチをかした。そうすると彼は鼻水をふいた。彼女はどうしても彼を許すことができず、いきどおりおこりながら帰っていた。帰り道、タケダくんが体操服袋を道に落としていた。彼女はとても怒り狂っていたので、そばに落ちていた犬の糞を体操服袋に入れ、そしてそしらぬ顔をしてタケダくんのところにポイと置いておいた。翌日、タケダくんは泣いていた。彼女は報復してやった気持ちとものすごく深い罪の意識を感じた。事件は3チームで出し合い、一番いい事件を取り上げる。取り上げる事件を決めたのち、泡沫裁判所というワークショップをしたいということを参加者につげ、事件を出したチー

ムが被告人と弁護団チームとなる。被告人は本人がする必要はない。他のチームは裁判所か検察となる。決め方も指定せず、時間のないときはくじ引きやトランプ、時間のあるときはその際にも合意形成を行う。体操服に犬の糞を入れたということを裁く法的な根拠はおそらくない。器物損壊にあたるかもしれないが、弁護側はそのときの犬の糞はカリカリに乾いており、袋につかず器物の機能は損ねていないという主張を行う。検察側は、ある刑法に則してこのような罪ということを主張するのが基本であるが、泡沫裁判ではそのような原則がなく、感情論や社会通念に照らしていい加減に行ってよい。泡沫裁判所というのは裁判所の機能がパンクしてしまい、いろんな人たちの主権意識が強くなり、細かい事件を裁けなくなってきたことから、勝手に設置して勝手に裁くという設定になっている。また、裁判所では、本来訴状が出てき、起訴されてからしっかりとそれを検討し予断をもたずに行うことが原則である。泡沫裁判所では時間がないため、それぞれが出してくるであろうことをある程度想定しておく。そして、私が裁判所書記官や裁判進行官となる。実際の裁判と同じように始めるが、厳密な被告人質問などは行わず、裁判官は適度にとめて質問があれば質問をする。最終的には、検察からの求刑が行われる。また、事件には裁判所が名前をつける。今回は「犬糞体操服袋混入事件」という名前だった。この事件では、本人に対する補償や示談は不可能である。しかし、事件は残っている。検察は「自分の家の周辺の犬糞を向こう一年間、発見したり処分したりし、社会に奉仕すること」を求刑する。裁判所はそれが妥当かどうか、有罪か無罪かを判断する。ここで一度5分間閉廷する。この5分間には、検察と弁護人は反省会を行う。裁判所は合議体をつくる。5分後に招集し、判決を述べる。今回の場合、「有罪。ただし、罰として向こう1ヶ月、家の周辺の犬糞を発見したり処分したりすることを命ずる。」泡沫裁判のため、一審で終わり。だいたい当事者が被告人をするが、被告人にとって裁判は本当につらい時間である。みんなに責められ、あそこに立つことがこんなにストレスになるのかと感じる。終わった後は、胸のつかえがとれた、有罪になったけれど本当によかった、という感想をもらう。罪を洗い清めるのが司法の理念であり、非常に感謝されるワークショップである。

2-1-2 マスココミュニケーション

人数が多いときは4チームで行う。4チームのときの1チームはマスココミュニケーションとする。裁判で発言はできないが自由に取材ができる。どのプロセスでも取材に行くことができ、媒体は何でもよい。今回は夕方のニュースという設定だった。

アナウンサー：国民を騒がせた犬糞体操服袋混入事件ですが、本日判決がくだりました。各地では不当判決だというデモが起こり...

コメンテーター：まあこれは、被告人のとなりの席のタケダくんに対するそこはかとな

い恋心がボタンの掛け違いによって報復の連鎖を起こした不幸な事件だったのですが... マスコミュニケーションの報道をみんなで振り返った。そうすると、被告側も建設側も「恋心」という言葉を一言も言っていないにもかかわらず、マスコミの手によってあのように一方的に報道されてしまうのかという意見があった。マスコミの方も視聴率をかせがなければいけない。犬の糞を体操服袋の中に入れてただけではニュースにならない。このように、第3の権力と言われるマスコミコミュニケーションのおそろしさをその場で当事者として知る。私自身は泡沫裁判を通して何もしていない。司会をして、「起立、礼。」やたまに「その発言問題ありますよ。」と言う。参加者が勝手にいろんなことを考え、いろんなことに気付く。勝手になっていくのも演劇のもつ力である。

2-2 俗議院

この犬糞体操服袋混入事件を裁くには、器物損壊などの法がある。また、物事がおきてから法がつくられるということがある。私の仮説では、刑事訴訟のもつ権力は莫大に大きい。やはり刑事訴訟に焦点をあて、もう一度三権分立を見直したい。例えば、この泡沫裁判から犬糞体操服袋混入事件を裁くための法をたててみようということを演劇ワークショップでできないかということを考えている。しかし、実際には刑法的なことを焦点として選挙があらそわれることはあまりない。演劇ワークショップなので設定をつくってしまう。

(設定) この犬糞体操服袋混入事件、一審で結審したにもかかわらず日本中でデモがなりやまない。衆議院を解散するわけにもいかないの、衆議院、参議院に続く俗議院というどうでもいい法を制定するための3院制とする。みなさんを俗議院議員に選び、泡沫裁判で扱うようなどうでもいい法律を制定していきたいと思う。

そのような俗議院に向けた演劇ワークショップをつくってみようと考えている。90分から2時間のワークショップを考えている。立法となると本来は選挙をへて、政策的な論争、法的な論争があり、選挙があり議会が形成されて話し合われて多数決で合意形成を行うというプロセスがある。劇的におもしろく、みなさんの理解と興味を考え、どこをどうかいつまんで90分の演劇ワークショップにするかを思案中である。

3 質疑応答

(野村)

共通点が多い。交渉の研究会などで新しい理論を研究していて、わからない言葉がある。アメリカの理論を輸入しており、これは日本であり得るのかと思うことがある。その1つが交渉するときには相手の「オートノミー」を尊重しなさいということである。人間にとって基本的な欲求の1つがオートノミーだと書いてある。欲求の1つが人に尊敬されたい、

認められたいという欲求だというのはわかる。もう1つがオートノミー、もう1つがステイタスと書いている。そして、オートノミーは自律と説明されている。自律が日本人にとって基本的な欲求の1つかと言われるとそんなことはないだろう。演劇ワークショップでアメリカのこの理論を説明できないか、説明できたとしたら導入できないか。参加をさせるという当事者意識、主権は今蓮行先生が言われた形では、小学校や中学校などで理解されていないのではないか。小学校や中学校では抽象的に言われている。主権や当事者意識として説明したものはかなりオートノミーに近いのではないか。学問的にやっているものはだいたい欧州の受け売りで日本では説明できなかつたり、使えなかつたりする。演劇は設定とキャストを決めたら、自分たちの事実を入れることができる。演劇の中で出てきたものが主権感情やオートノミー感情に至り、その中で出てきた言葉を使って説明したらすっとわかるのではないか、というのが私なりの大発見である。ただ、私の専門分野である交渉学や紛争解決では、演劇ワークショップなどは要求できず、ピアレビューなどに書くすべてアウトとなる。蓮行先生のようなかわった経歴をもって学者になっている人だとおもしろいと思って高く評価すると思う。私がピアレビューを書くと、このようなレビューは下にきて、日中韓で共通の法ルールを作るというものが上にくる。どちらが日本の社会にとって役にたつかというと、泡沫裁判などの方が実はすごく重要ではないだろうか。なんとかもう少し研究面でも接点を見出したいと思っている。3月末までに1度東京で交渉教育の研究会がある。旅費はお支払いするので来ていただき、今のようなお話をしていただけないかと思っている。

「メタ視点」(「蓮行流 演劇ワークショップ術プリント」)

(蓮行)

オートノミーに関連して、演劇ワークショップを演出家や劇作家という視点から考えた場合、俳優や演出家、劇作家は「メタ視点」(「蓮行流 演劇ワークショップ術プリント」)を自然にもっている。メタ視点とは、上から見ている視点のことである。オートノミーを大事にしている人、例えば欧米人がいて、その人と交渉する場合には、それが重要である。いったん交渉の場から離れ、私と対象は誰かというメタ視点をもつとオートノミーが重要になる局面があるし、ならない局面もあることがわかる。どういう設定でどういうキャストなのかということを包摂して見なければいけない。なぜそれが我々にとってとても大事か。例えばあるむずかしいシェイクスピアの劇を子ども向けにするとする。どのキャストを外そうかと考えた場合、見る子どもの立場にたつてどう変えていくか、というメタ視点が必要である。当時の社会的背景を劇作家が理解した上で、現代の子どもたちに何を大事として抽出するかによって捉え方がかわってくる。わかりやすいだけではだめで、わかり

にくくても入れなければいけないこともある。欧米から輸入してきたものについても、本当にそうかというのはやってみたらいいと思う。帰国子女で俳優をやっている人もいる。町内会の会長と留学生で学生寮に住んでいるという設定でゴミの出し方について交渉を試みよう。それをメタ視点で見る。かみ合っていないけれど、どうしてかみ合わないのだろう、かみ合ったけれど落とすところがないなどということはお客さんの視点からわかる。この理屈はこういう妥当性はあるが、こういうときは使えないということがわかる。町内会の会長は町内会の人だけれど、実はオートノミーを意識しているかもしれない。自律の部分抽出できることもある。劇作家は脳内でシュミレーションをして台本を書いたり、仮説をたてて俳優を動かして台本を書いたりしている。

(多胡)

帰国子女ではなく、欧米人がきたらもっとはっきりする。

(高橋)

そのようなケースはないのか。欧米人も参加すると日本人と異なる反応がでるのではないかと思う。

(蓮行)

私自身はそのような現場をもったことがないが、平田オリザは世界中でそのようなことを行っている。ゲームをすると違いが非常によくわかり、実際にそのようなことは起こる。例えば、欧米人といきなり交渉を行うと当事者同士がそれを行うというリスクが発生する。演劇ワークショップではそのリスクをどのように解消するかということを考える。最初は反対にしてみることや設定をいれかえることを考える。また、お遊びのため交渉する内容をどうでもいいこととすると、誰も傷つかずにすむ。クッションをふみ、当事者同士でもう少し深い内容について交渉を行う。その点でディベートも演劇的な手法のひとつの方法といえる。総合大学はそんなことができる場所であると思う。私は、自分の授業に留学生がいたら大事にする。私くらいの歳になると立法ワークショップは考えているが、何かアイデアはないかと学生になげかけかねない。

(野村)

その手法は交渉でも使われている。ホッタショウゾウという法社会学の教授がいるが、彼は自分のゼミ生に模擬交渉を練習させ、交渉コンペティションに参加させる。普通ならば、教員がつくったものや過去問でロールプレイをさせるが、ホッタ教授はチームにわけ、お

もしろい交渉事例をつくってくれと言って4チームくらいを競わせ、おもしろい事例を実際にやらせてみる。自分たちがつくったものを自分たちですることによって、他の力もやしなわれる。すごく有効なツールである。

(蓮行)

学生が主権を発動する。CSCDの授業は平田オリザと2人で受けもっている。この3年間で一度も打ち合わせをしたことがない。まず、2人の授業に関連性がないことに関して2人が一切気にしていない。去年から導入したのは、「私は平田さんと一切打ち合わせをしないので、先週どんな授業をしたか3チームくらいのグループで5分間話し合い、2分ずつで教えてください。」というものである。平田さんの授業にパターンがあるため、だいたい知っているというのものもあるが、3チームそれぞれにさせると、1チームが説明を終えるとあらかじめ言われてしまったので、「パフォーマンスの世界」という授業のため、「授業の様子を劇でやってみます！」とやってやり、3チーム目もまた違うやり方をする。すべて学生にやらせてしまうと、授業後のアンケートをかねた出席カードでは、「先週やったことをあんなにすごいと思ったのにほとんど忘れていたということに気がつきました。」「私は先週欠席したのでありがたかったです。」という感想がかえってくる。学生が主権を発動すると私はとっても楽である。

(野村)

それは「不親切グラフ」(「蓮行流 演劇ワークショップ術プリント」)につながる。

「不親切グラフ」(「蓮行流 演劇ワークショップ術プリント」)

(蓮行)

教える側が親切にすればするほど、学ぶ側の学びが下がっていくというグラフである。このグラフを授業の最初に描き、導入とする。しかも、大阪大学は国立大だから「きみたちの授業料は親が払ってくれているけれど、ほとんど税金でまかなわれている。きみたちはユーザーではない。国民の負担にこたえなければいけない生産者である。そんな人たちに高い能力を発揮してもらうのに、こちらが親切にすると私が納税者の負担にこたえることになる。きみたちは非常に高く期待された人材なので、私の授業がわかりにくかったり、教室変更の案内が雑だったりしても全部きみたちへの期待のあらわれなのだ。」という話をする。当事者は苦笑し、クレームが少なくなる。いろんな先生にこれを使ってもいいですかときかされている。青山学院大学ではeラーニングにも使われている。

(野村)

ぜひ文部科学省にも導入を。教員が手を打ってよろこぶだろう。

(蓮行)

先生がたにはぜひ機会があれば、司法ワークショップを授業や研究会で行う場合、来ていただきたい。予告する。実際行っているところをみると、あれ？と思うところなどあるかもしれない。どのように立法につなげていくかということと、初等教育（小学校）から当事者意識、主権意識、自尊感情を身につけさせたいというのが根源的な思いである。「演劇で防犯」は来年2月に私の娘が通っている小学校で京都府の予算で行う。防犯というのは特に自尊感情をもって、自分の身を守らなければいけない。自分の身に何かおこると悲しむ人がたくさんいるのだということがとても大事である。その感情が利得感情に勝らなければ、連れて行かれてしまう。来年2月のワークショップでは、私が当事者意識をもって行う。不審者をどのように包摂していき共存していくか、次のステップを提示していく義務が私にはある。当事者意識をもって真剣に考えてみようと思っている。

演劇ワークショップは見たことがない方には、理屈はわかるが手がかりがないだろう。

(多胡)

いろんなワークショップをされていると思うが、これまでの例の他にどのようなワークショップをされてきたのか。

「フルスケールの演劇WSとモジュール」（「蓮行流 演劇ワークショップ術プリント」）

(蓮行)

環境はフルスケールのものである。一番ハードなものでは、小学校で90分×12コマ行った。込み入った議論を何コマもかけて行う。最後には、学習発表会として保護者の前で行い、シンポジウムも同時に行う。今後、どのように行っていくかを保護者と議論していくことや、子どもたちにインタビューしてもらうこともある。フルスケールとモジュールの中間くらいに司法ワークショップと立法ワークショップがある。司法ワークショップと立法ワークショップでは、設定を決めて即興で行う。モジュールは部品という意味である。教育学では、15分くらいでできるようなゲームのことをいう。例えば、5人ずつのグループにわかれたとき、歩きながら自分の足跡はふめない、手をたたいた回数で、3回ならば3人組、5回ならば5人組というふうに組をつくるというルールを決める。そうすると、だれと組もうかと考える前に3人組や5人組をつくってしまう。このようなコミュニケーション

ョンゲームを導入する。これら、モジュール、即興、フルスケールを適宜組み合わせしていく。今度行うのは、エコ学区でエコクイズをつくり、エコ意識を高めるものである。ただクイズをするだけではもりあがらないため、どのようにおもしろい教材にし、どこでもできるような方法をつくるかということを考えている。モジュールとしては、1人見るからに変な人を設定し、4択クイズのうち、絶対この答えはないという変な答えに必ず答える人にする。そしてその人は、絶対正しいという主張を一生懸命する。そうすると、必ず子どもが説明しだす。単に答えて説明をきくよりも、子どもに参加が促される。また、4択のうち必ず1つは間違いだから、子どもにとっては3択となる。自分がリスクを追うことは怖いけど、変な人が1人いるだけで助かる。汚れ役は町内会長さんにさせていただくことが多く、言うときのコツなどを俳優が伝授する。このような演劇における知見から研修会を企画し工夫して開発している。

(高橋)

これまで何年間かやってこられて、最初の段階と最後の段階で子どもや学生の考え方や行動が変わったということは感じられるか。

(蓮行)

それを一番感じるのは、私ではなく担任の先生である。普段、本当におとなしい子どもがあんなにしゃべるのをきいたことや、本番でそれができたことに担任の先生はおどろく。実はその子どもは演劇の内容を相談するところからリーダーシップをとっていた。かわったというよりも見せてこなかった面を見せたり、本人が知らなかった自分を開花したりする。逆もあり、普段はガキ大将だが側面支援にまわり、脇役をしっかりと果たすこともある。我々もキャスティングのときに工夫し、台詞は少ないがいいところで目立つ役をもうけ、普段とは異なる面を發揮させようとする。先生との打ち合わせでこの子は問題があるなどきくが、話半分で少しだけ工夫しなるべくコントロールしないようにする。我々と一緒に出演するため、楽屋で子どもに話しかけることもある。いつも「ボス」と呼びかけ、「ボス、だいじょうぶ。ボスならできるから。」などと声をかける。演劇ワークショップを通して、普段のおとなしい子どもでは出てこない関係性が出てくる。舞台上で見えているものは氷山の一角である。

(多胡)

蓮行先生が行っている手法を制度として組み込んでいくことはむずかしいのだろうか。

(蓮行)

当事者としては、そのような動きを始めている。ひとつは、平田オリザが文部科学省からの年間2億円をもとに試行しているものがある。2億円で1年に150校～200校で演劇ワークショップを行うことができる。そのうち10校～20校は劇団衛星がかかわっている。文部科学省も実装していく当事者であり、試行は進んでいる。今年は3年目である。

(高橋)

文部科学省も評価してくれるとある程度広がっていくのか。

(蓮行)

演劇ワークショップは一方で非常に抵抗がジャンルでもある。なかなか受け入れがむずかしいため、簡単には広がらないと思っている。しかし、新人をその制度でそめていけばいいだろう。政令指定都市ではむずかしく、衛星都市では動きが出てきている。衛星都市から実装化が進んでいくだろう。海外、特に欧米や韓国では小学校でこの制度が進んでおり、日本の数百倍規模の予算が組まれている。「フィンランドメソッド」では、算数の教科書の最後に紙芝居でやってみましょう、ラジオドラマを作ってみましょうという課題がある。

(高橋)

海外では実績がでてきているのに文部科学省ではあまり評価していないのだろうか。

(蓮行)

どちらかという、海外で実績がでてきたことでやっと試行ができる環境が整った。これは、「緩やかパラダイムシフト」(「蓮行流 演劇ワークショップ術プリント」)である。演劇ワークショップはこれまでのスクーリング型の初等教育を真っ向から否定しかねない。また、演劇ワークショップを担える人材もいない。京都市内だけでも70人くらいのプロの俳優がいなければいけないことになる。人材教育プログラムは大阪大学をひとつのベースとし、青山学院大学と組み、再来年くらいに実施するつもりでいる。現在は、人材育成と制度作り、実績作りを同時に行っている。

(野村)

「緩やかなパラダイムシフト」について説明してほしい。

「緩やかパラダイムシフト」(「蓮行流 演劇ワークショップ術プリント」)

(蓮行)

建前として、主権を発動する、合意を形成すると言ってきたが、本音は相手の主権をどのように尊重するということを大事にしていきたい。演劇ワークショップや演劇は劇薬である。幸い当初から、劇薬性は意識しており大きな事故を起こさずにきている。このことは平田オリザから言われたことである。

(事故例) 片方の親が外国籍の子どもたちに日本の文化を理解しましょうというワークショップを行ったとき、親の国籍を否定する子どもが増えてしまった。

これはプログラムに問題があったからである。しかし、そこまで想定してプログラムをつくることはできない。あなたのお父さんお母さんは何何人でそれはそれで尊いあなたがうまれてきてそれがマイノリティーではあるが、今の日本の社会にとけ込んでよさを発揮しながら分かり合いながらやっていくという気持ちを醸成していかなければいけない。それはまさに、片方の親が外国製というその子どもが生活の中で培ってきたパラダイムであり、そのパラダイムをどのように尊重しながら少しパラダイムをかえるかということである。そのような子どもたちに授業をするときには、我々は年に1回来るか来ないかの変な大人で、明日からは来ないから明日からはもとの学級に戻るように、ただし今まで見えなかった側面を自分も知り、先生も大人もお友だち同士も少しだけ知ったクラスにしておわたしすることを心掛けている。そしてそれが「可逆性の担保」つまり元に戻せることである。これは、我々の心掛けの問題であり、壊してしまうこともできる。特に子どもの発達段階が下がれば下がるほど心掛けている。反対に、大学であればFDの一環として私の先生だめだなどと思って帰っていくくらい大胆なパラダイムシフトを起こすつもりで行う。大学生は座学的に学ばなければいけないこととワークショップ的に学ぶことを自分でわかっているから、大学ではあまり否定的な要因はでてこない。相手に合わせて行う。

(野村)

パラダイムシフトというのは、蓮行先生が管理されているということがパラダイムということか。どれがパラダイムか。

(蓮行)

今そこにあるパラダイムのことである。若手の優秀な先生は、子どもに自由にやらせていて、私たちが来なくてもできているというクラスもある。そのようなクラスはそのようなクラスのままでよい。そこに少しちがうことをエッセンスとして入れる。だいたい今は、1学年に1クラスから2クラスである。片方のクラスは旧態依然としている。それを少しかえる。

「インプット>アウトプット」(「蓮行流 ワークショップ術プリント」)

その場のクラスのパラダイムがどういったものかをインプットしておかなければ、適切なアウトプットができない。我々はまずアンテナを広げ、その場のパラダイムを吸収する。打ち合わせの機会があるならば、先生が暗黙のうちに意識しないけれど持っているものなるべく理解する。そうしなければ、安全かつ有効なワークショップができない。これは心掛けの問題である。今は大丈夫だが、システム化をし、人材育成を行ったときに、玉石混淆となりリスクとなってくるだろう。

(多胡)

中学校や高校のスクーリング、今のパラダイムとの比較でいうと、ヨーロッパへ行った折、見学させてもらった中学校や高校の授業は、日本で行われている授業の仕方と全く異なる。ヨーロッパでは、どちらかという教師が話をする、教えるというより生徒みんなで話し合わせる。その結果として、日本の青年や大学生は自分の意見をはっきりと言わないといわれ、欧米の若い人たちは自己主張をきっちりとする。それは、小学校や中学校までの教育のひとつの現れとしてできているのではないか。今までの日本のスクーリングをパラダイムシフトしていくようなことが教育問題の根幹にあるのではないか。蓮行先生の取り組みは、刺激剤として大事なことだという印象を持った。ヨーロッパやおそらくアメリカにも、「市民教育」というテーマがある。それが日本には欠けている。蓮行先生の取り組みは「市民教育」のひとつのバリエーションとしても位置付けられるのではないか。

(蓮行)

「市民教育」という言葉は使ってこなかったが、おっしゃる通りだと思う。私は日本の社会は概ねいい社会だと思っている。それを後少しよくしていきたい。また、国際的な交渉の時などに、日本の教育がドラスティックに不利益をうみ出してしまうことがあったり、だから日本人はだめだと言われてしまったりすることがある。

(多胡)

特にアメリカでは、「市民教育」というものがきちんとした概念として出てきている。

(野村)

英語では「シティズンシップ (citizenship)」という科目があるが、それは日本では「公民」と訳している。「家」とは異なるところの市民が公民であるが、公民はいかにも右翼的な感

じがする。シティズンシップは必要ではある。国家ではなく、市民に力をつけるということが重要である。今度東京へ来ていただきたいと思ったのも、公教育まさに公民教育の一環で交渉のロールプレイと結びつけられないかと言っていたところだったからである。

(木川田)

去年、大学のインターンシップで関西のいろんな大学生が来るものがあった。(2011年度大学コンソーシアム大阪主催プロジェクト型インターンシップ

<http://www.kmo-jp.com/activity/internship2011/>)ワークスタイルを考えるというテーマで、「うめきた」に街ができることについて若い人たちの感性が街をつくるという考えから、発表を行った。その発表を蓮行先生にご指導いただいた。その発表では、ディスカッションしたものを演劇で発表するグループがあった。終わった後、その学生たちが泣く。どういう意味なのかと考え、「演ずる」ということはただ頭で考えて口で言う、ただプレゼンテーションで伝えるのではなく、自分たちの五感でうったえ、それが伝わったという実感があり、そこから自分たちの気付きを得たための感激なのではないだろうか。教育効果としては、最後に泣かせるということ。達成感と満足感と自分の中での気付きに感激したのではないだろうか。

120人の受講生がいる「グローバル・リーダーシップを考える」という講義では、15チームに分け、1チーム8人のワークショップ型で行っている。講義では2回発表させるが、3分の1のチームが演劇で発表を行う。私が言わなくても、彼ら自身のオートノミーで行う。発表の方法は何でもよく、パワーポイントをもちいて発表するチームもいる。1チームがひとつの星を持ち、どこのチームがよかったか投票させる。いろんなクイズを通して投票を行い、一番星の数が多いチームを優勝チームとする。チーム同士を競わせているが、演劇で星をかせぐ。演劇はインパクトがすごい。これからのグローバル・リーダーシップ、自分たちはこう考えるというのを演劇で行う。演劇は効果としてインパクトが大きく、演劇をどう講義の中に取り入れていくかを考えている。ただ今ひとつひっかかっていることがある。オートノミーを求めて異端な考え方、思想を表現していくとする。ソーシャルイノベーションはだいたい異端児がするのでその傾向はいいと思う。先ほどコンセンサスビルディングという話があったが、それを行うとコンセンサスビルディングが足をひっぱり、同一にしてしまうのではないか。弊害があるのではないか。特に今、日本人のイノベーションがなかなかおきないというのは、各企業でコンセンサスビルディングがきつくはたらいっているからである。例えば、「ルンバ」のような掃除機は10何年前にパナソニックが考え、試験的なものができている。ところが、階段から落ちて人にあたったら事故になるな

ど、万が一にも起こらないようなことでブレーキがかかってコンセンサスがとれない。コンセンサスビルディングというものを演劇の中でもたせるということがオートノミーとの関係でどうなっているのか答えがない。

(蓮行)

その点について、平田オリザが説明していることがある。演劇ワークショップはヨーロッパで始まったのだが、もともと主権意識や自我意識が強い人たちにどのように合意を形成してもらうかということについて研究されてできたものである。そういうメソッドを日本人が海外でまじめに視察してきて、これを同じように日本でもしようとする、もともと同調圧力が強い組織にさらに同調圧力を加えてしまう結果になる。そのため、平田や蓮行が行うワークショップは、それぞれの主権の発動の方を重視して翻訳している。これは宿命的な問題である。我々が直接行ったりしたりする場合はよいが、それを見た人がしようとした場合、できてしまうが副作用が強くでてしまうリスクがある。

(木川田)

あまりにもコンセンサスビルディングができすぎると結論がはっきりしてしまう。オートノミーを発動すると、少しとんがった同士ですることになり、色々な課題や解釈をもたなければいけない。荒れ回しているようだが、それが自分にかせられていると解釈しなければいけない。

(蓮行)

演劇ワークショップは手段である。演劇ワークショップでは、機能性について考えている。また、それを適切にデザインできる人材をどのようにつくっていくかを考えている。今、日本ではそのような人材が二桁いるかいないかであり、そのうち2人が大阪大学にいる。人材を育成し、演劇ワークショップをできるものかそうでないかは、今後拡大していくための課題である。

(木川田)

阪大の中でも知らしめていくことが大事ではないか。大学祭でも、演劇にかかわるいろいろなプログラムがあると阪大らしい。

(蓮行)

学生劇団では、先輩から受け継がれてきたものに縛られた劇をしている。演劇を行う人た

ちが案外縛られている。

(多胡)

現在の日本社会では、合意形成の理解、仕組み、ありようが核心的な問題のひとつではないか。

(木川田)

合意形成の諸刃の刃をよく考えなければいけない。例えば、セコムは警備員を派遣する事業をやめるとオーナーが言ったことがあった。そのことについて会議で投票した結果、みんな反対でやっぱりやることにした。そのことがセコムの事業形態をがらりと変えた。ひとつの事業イノベーションを行っている。日本人の合意形成が得意なことが足かせになっている。

(仁木)

アメリカ型の調停の研究及びトレーニングにかかわっている。調停でもロールプレイを取り入れており、日本でも一部の指導者は熱心に行っている。実際にその現場に同席してみるが、むずかしいと思う。今日の話と関連することはあるが、距離もある気がしている。調停というのは、喧嘩している2人に合意形成に向けて話し合いをしてもらうものである。そこには、一定の型がある。その型をきっちりと守る必要はないが、調停を行う人は、ある程度実践の中でその型を習得していないとむずかしい。その型は、対話をする人たちが対話をかみあわせていくための作法である。アメリカのトレーニングセンターを見て話をきき、ベテランの人にくっついてまねるとするのが重要であると思った。今日の蓮行先生の話は、個人個人の自由な振る舞いを奨励している。また、その振る舞いを通して自分が気付かなかった一面を自分でも見出していく。その点にギャップがあるような気がした。演劇的な要素を取り込むトレーニングでも、蓮行先生の話との距離をどうはかっていけばよいのか、アドバイスや気付きがあれば教えていただきたい。

(蓮行)

演劇ワークショップの中で、私はコミュニケーションティーチャーという役割である。調停員がコミュニケーションティーチャーということができないのではないか。出演者、つまり子どもが調停される人たちにあたるのではないか。彼らにはある程度自由な振る舞いをさせるが、コミュニケーションティーチャーは同じ落としどころにうまく誘導していけることが重要である。そのような方法をつくっていかなければいけない。コミュニケーショ

2012/10/26

大阪大学リーダーシップ教育研究会 第23回会合 議事録

作成：岩崎茉衣子 (iwasakimaiko@gmail.com)

ンティージャーが一番行っていることは、OJT しかない。自由な振る舞いをさせるための方法を身につけるという意味においては、トレーニングセンターと我々のしていることは一致している。型を身につけるという点では、距離はないと思う。演劇ワークショップを通してこの社会をどうするかという漠然とした問題も大事だが、このセクターにはこの方法というようなことも考えていかなければ行けない。

(野村)

自由にやらせるためにはそれなりの手段が必要。